

東海道五十三次

江戸の世界を

旅する

【監修】
國學院大學文学部教授
藤澤紫

東海道五十三次 江戸の世界を旅する

目次



歌川広重ってどんな人? 4
 浮世絵についてくわしく知ろう 6
 東海道五十三次と弥次喜多道中 8



出発地
 一 日本橋【朝之景】 10
 二 品川【目之出】 12
 三 川崎【六郷渡舟】 13
 四 神奈川【台之景】 13
 五 保土ヶ谷【新町橋】 14
 六 戸塚【元町別道】 14
 七 藤澤【遊行寺】 15

八 小田原【酒匂川】 19
 九 箱根【湖水園】 20
 十 三島【朝霧】 21
 十一 沼津【黄昏図】 21
 十二 東海道の旅の小道具 22
 十三 弥次喜多と現代の旅人② 23



東海道の旅のファッション 16
 弥次喜多と現代の旅人① 17
 十四 原【朝之富士】 24
 十五 吉原【左富士】 24
 十六 蒲原【夜之雪】 25
 十七 由井【由比】 【薩埵嶺】 26
 十八 奥津【興津】 【興津川】 27

東海道の名物・グルメ 30
 弥次喜多と現代の旅人③ 31
 十九 江尻【三保遠望】 27
 二十 府中【安部川】 【安倍川】 28
 二十一 岡部【宇津之山】 29
 二十二 藤枝【人馬継立】 32
 二十三 嶋田【大井川驛岸】 32

二十四 金谷【天井川遠岸】 33
 二十五 日坂【佐夜ノ中山】 34
 二十六 掛川【秋葉山遠望】 35
 二十七 袋井【出茶屋ノ図】 35
 二十八 見附【天竜川図】 36
 二十九 濱松【冬枯ノ図】 37
 三十 舞坂【今切真景】 37

三十一 荒井【新屋】 【渡舟ノ図】 40
 三十二 白須賀【汐見阪図】 41
 三十三 二川【猿ヶ馬場】 41
 三十四 吉田【豊川橋】 42
 三十五 御油【旅人留女】 43
 三十六 赤坂【旅舎招婦ノ図】 43
 三十七 藤川【棒鼻ノ図】 44
 三十八 岡崎【矢矧之橋】 44
 三十九 池鯉鮒【知立】 【首夏馬市】 45
 四十 鳴海【名物有松絞】 46
 四十一 宮【熱田神事】 47
 四十二 桑名【七里渡口】 47
 四十三 四日市【三重川】 48
 四十四 石薬師【石薬師寺】 48
 四十五 庄野【百雨】 49
 四十六 龜山【雪晴】 50
 四十七 関【本陣早立】 51
 四十八 阪之下【坂下】 【筆捨嶺】 51

四十九 玉山【春之雨】 54
 五十 水口【名物干鰯】 55
 五十一 石部【目川ノ里】 55
 五十二 草津【名物立湯】 56
 五十三 大津【走井茶店】 57
 終着地 京師【三條大橋】 58
 東海道と浮世絵 Q&A 60
 さくいん 62



東海道の難所越え 38
 弥次喜多と現代の旅人④ 39
 街道の風景いまむかし 52
 弥次喜多と現代の旅人⑤ 53



出発地

日本橋

(にほんばし)

あさのけい
朝之景

東海道の起点となる橋で、江戸から全国にのびる五つの街道は、すべてここから始まりました。
多くの川や運河が入りまじって流れるこのあたりには、魚河岸（魚の市場）が見られ、旅人とともに多くの物売りたちが集まり、とても活気に満ちていました。

「お江戸日本橋七つ立ち（七つは午前四時ごろ）」と歌われたように、早くから参勤交代の行列や人々の往来がたくさん見られました。
このように早朝にたつのは、日中ができるだけ遠くまで歩いて宿代が少しでも安くすむようにするためといわれています。



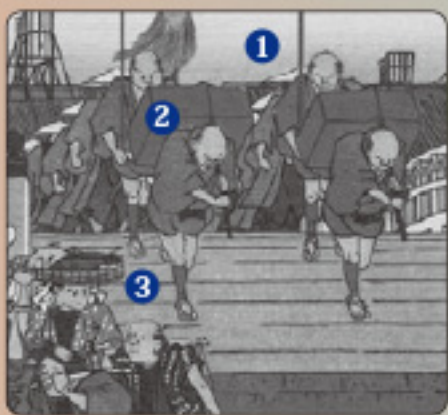
出典/国立国会図書館デジタルコレクション (以下同じ)

絵とき

明け始めた空(1)を背景に、参勤交代の大名行列(2)(▼P80)の一行が橋を渡っている。「しよがねえな」とでもいったげな魚の行商人たち(3)とともに、おくれが書かれた高札(4)の下にいる大たち(5)も、行列に道をゆずっているように見える。

「棒手振」と呼ばれる魚の行商人たちは、天秤棒(6)でまな板など(7)をかっついて、その場で魚をさばりて売

ることもあった。冷蔵庫のない時代のこと、魚を売るのは時間との勝負だった。



首都高速道路が上を通る現在の日本橋。



名物メ.

歌川広重の「東海道五拾三次之内」には、各地の名物や特産品もたびたび登場します。ひと休みして名物に舌鼓を打つ旅人や、店の女性たちもいきいきと描かれています。



とろろ汁

「東海道中膝栗毛」にも登場し、広重も浮世絵に描いた駒子宿の名物。自然薯をすりつぶし、白みそ汁仕立てで食べる。写真は戦国時代の慶長年間創業という駒子の老舗のとろろ汁。



「東海道五拾三次之内 駒子名物茶店」の一場面。



茶飯

茶汁で煮た大豆といっしょに炊いてつくる。「東海道中膝栗毛」の川崎のシーンにも「奈良茶飯」が登場する。

「江戸名所図会」でも、奈良茶飯の名店、万年屋を大きく取り上げている。出典/国立国会図書館



瀬戸の染飯

藤枝宿の名物。くちなしの実で染めた飯で、あざやかな黄色が特徴。江戸時代のは形が異なります。出典/藤枝市



「東海道五拾三次之内 二川猿ヶ島場」の一場面。



安倍川餅

府中宿の名物。徳川家康が命名したとの説も。出典/農林水産省

田楽

石部宿のいせやで、菜飯とともに人気だったという豆腐田楽。出典/滋賀県



「東海道五拾三次之内 石部 目川ノ里」の一場面。



かしわ餅

柏の葉で包んだ餅。浮世絵にも登場している二川宿が、発祥の地ともいわれている。



姥が餅

草津宿の名物。その由来は古く、戦国時代にさかのぼるといわれる。

写真提供/南酒所

「東海道五拾三次之内 大津 定井茶店」の一場面。



右上/かんびょうの天日干し風景。左上/材料となるユウガオの実。左下/完成品。

水口かんびょう

水口宿の付近でさかんにつくられていたかんびょうは、甲賀市水口町の特産品で、水口宿の浮世絵の天日干しのシーンは今でも風物時になっている。

写真提供/甲賀農産協同組合

「東海道五拾三次之内 水口 名物干菓」の一場面。



大津市にある月心寺境内で今も湧き続ける定井。

走り井餅

大津宿の走り井は水が清らかで、この水でつくる餅が旅人にとっても人気だった。

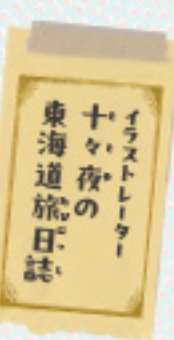
写真提供/井原八ッ橋本舗



「東海道五拾三次之内 草津 名物立場」の一場面。

現代の旅人と弥次喜多と

3



弥次喜多の時代の東海道は、旅人がとても多く、食事や休憩をする茶屋がちょうどよい場所にたっていました。現在、逆にお店がない場所もあり、非常食用のお菓子は必需品でした。自動販売機の甘い飲みものもオアシスでした！

このページの名物のほとんどは、定休日、時間外、タイミングの問題などで食べそこないましたが(残念)、ほかにも餅菓子の名物は多く、エネルギー補給に最適でした。



街道の風景 いまむかし

風光明媚な海山の風景も、東海道の特徴のひとつ。江戸の旅人が自にしたであろう絶景の多くは、現代でも昔と同じように見える場所もあります。



薩埵峠 静岡市にある富士の絶景で知られる峠。由井宿と奥津宿の間にあり、広重の浮世絵のような風景が見られる場所として有名な観光スポットのひとつ。



▲「東海道五拾三次之内 由井 薩埵峠」より。



▼「東海道五拾三次之内 川崎 関 鶴瀬舟」より。



多摩川橋梁 彼方に富士を望む多摩川橋梁。川崎市から都心方面に向かう通勤電車が見える。



菅ノ湖 箱根の景勝地として知られる湖。周囲を独特な山容の山々に囲まれ、湖畔には浮世絵にも描かれた箱根神社がある。



▲「東海道五拾三次之内 箱根 湖水面」より。



高麗山 神奈川県平塚市と大磯町の境にそびえる独特の山容の山。浮世絵にもその特徴的なようすが描かれている。



▲「東海道五拾三次之内 平塚 桶子道」より。



清水港 世界遺産「三保松原」がある三保半島に守られた貿易港。外国船がひんばんに出入りする。



▲「東海道五拾三次之内 江尻 三保遠望」より。



大井川 鳴田宿と金谷宿の間にある難所のひとつ。貨物列車が鉄道橋を渡るこの写真は、浮世絵とは反対で金谷側から鳴田側を見た風景。



▲「東海道五拾三次之内 金谷 大井川河岸」より。

有松絞 名古屋市有松の伝統工芸品として有名。浮世絵では鳴海宿として描かれているが、近隣にある有松宿に、当時の面影が今も色濃く残る。



▲「東海道五拾三次之内 鳴海 名物 有松絞」より。



▲「東海道五拾三次之内 白須賀 沙見原図」より。



白須賀海岸 浜名湖の西側にひろがる白砂青松の海岸。浮世絵にもおだやかな海が描かれている。



東海道には昔の建物や風景が多く残っていますが、わたしが「東海道を歩いているんだ」と深く実感したのは松並木に出会ったときでした。松の場合、寿命は三百年から五百年とか。過去から現在へ、現在から未来へと残していくことができる遺産です。昔から使われている道は、必ず人の住んでいる場所にあります。近所にもおもしろい道が見つかるかもしれません。一里塚を見つけたら、昔の道はとても楽しいもの。ぜひ楽しんでもらえたらうれしいです。



現代の旅人と 弥次喜多と

